

令和2年度 環境で地方を元気にする
地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業

成果報告会 発表資料

活動団体名：熊本県小国町

活動地域：熊本県小国町



活動におけるテーマ・キャッチコピー

地熱とバイオマスを活かしたまちづくり



ALL FOR THE NEXT GENERATION

～すべては次世代のために～

地域循環共生圏を実現することで目指す地域の姿



小国版 地域循環共生圏 マンダラ図

②地域課題 人口減少
(地域コミュニティの崩壊)

②地域課題 地域産業の空洞化

②地域課題 CO2の排出

多様なステークホルダー：住民・企業・事業者・金融機関・有識者・教育機関など



地域循環共生圏を活用して目指す地域の姿



地域資源を活かした循環型の社会と産業を創出し、将来にわたって持続可能な町



地域のありたい未来の実現のために 今年度取り組んだこと

今年度新たにチャレンジしたこととその具体的な取組

● 【コミットメント】 主要計画への同期

- ▶ 次期（第6次）総合計画（2021～2030年度）
- ▶ 次期（第2期）SDGs未来都市計画（2021～2023年度）



小国町総合計画策定審議会の様子

● 【長期ビジョン】 3つのタネ

▶ 地熱を利用したスマートアグリビジネス事業（カカオ生産に向けた検討）

- ・ カカオ豆生産の実証実験について、農業アドバイザーと進め方について協議。
- ・ 視察：県内でカカオを栽培している熊本市動植物園を視察し、情報収集。

▶ 超スマートエネルギー社会の検討（公共交通検討）

- ・ 生活圏が同じ隣町と連携し、合同で自主財源でのバス運行の検討を開始。
- ・ R3年度に公共交通計画策定及び実証実験実施、R4年度に本運行予定。

▶ SDGs教育を発展させたESD教育ツーリズムの商品の検討

- ・ 企業と、環境教育に取り組む連携協定締結
- ・ プロジェクトチームの設置し、環境教育のプログラム及び旧校舎の活用について検討
- ・ 中学生のプレ交流をSDGs先進自治体と計画⇒COVID-19の影響でプレ中止。
現在、商品化調整中。R3年度に約200人/2団体受入れ予定。



カカオ栽培を視察

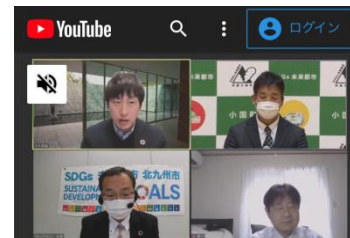
● 【広報・周知】 SDGs・地域循環共生圏づくりフォーラム/勉強会の開催など



①SDGs特別授業



②広報番組制作



③フォーラムの開催



④SDGsカルタの制作

地域のありたい未来の実現のための「事業のタネ」

1	事業名	地熱を利用したスマートアグリビジネス事業		
	概要	【地熱の2次利用と新たな農産物の開拓を結び付けた新たなスマートアグリビジネス事業の実証実験】 小国町の地熱ハウスでの野菜栽培による同企業の目指す地産地消のチョコレートの生産と、町の新しい農産物の生産及び雇用を目指す。また、原材料等の輸送に伴い排出されるCO2削減によるフードマイレージ問題の解消及び人材育成・新規雇用の創出、農業従事者の働きがい・経済成長を目指す。		
	課題・ボトルネック	カカオ豆の収穫・生産（実証実験）には数年を要する（約4～5年）。	力を借りたい人物・企業像	亜熱帯地域の農作物に栽培に知見を持つ専門家及び事業者

2	事業名	グリーンスローモビリティの社会実装の検討		
	概要	【CO2削減と公共交通の確保に向けた検討】 高齢化に伴う交通弱者の救済、公共交通サービスの縮小、加えて交通事業者におけるドライバー不足という町の切実な課題を解決するため、新モビリティサービス（グリーンモビリティバス）の社会実装の可能性について検討する。		
	課題・ボトルネック	・グリーンモビリティ及びドライバーの確保 ・運輸局やグリーンモビリティバス運行事業者との調整（とりわけ法規制によるもの）	力を借りたい人物・企業像	・交通事業に知見を持つ専門家及び事業者 ・近隣自治体

3	事業名	ツーリズム（グリーン、医療、教育）によるSDGs（地域循環共生圏づくり）の普及展開		
	概要	【SDGsの視察等に対応したツーリズムの商品化】 2019年度から町では、観光地に例年以上の観光客が押し寄せたり、SDGsの取組への視察の申込みが増加。しかしながら、町の持ち出し（職員の人件費等）のみで経済効果に繋がっていない。そのような現状を打破するため、ツーリズムによる仕組み・商品化作りを行う。		
	課題・ボトルネック	・観光やツーリズムの企画運営の事業者の確保及び調整 ・受け入れ先となる場づくりと体制づくり ・ガイド不足（人材育成を含む）	力を借りたい人物・企業像	・旅行会社 ・医療及び教育（とりわけ生物多様性）の専門家 ・建築家又は建築の専門家 ・地域コーディネーター

今年度の環境整備の取組による地域の変化や気づき

話を聞きに行く！

- ステークホルダーは、全員協力的だったため、巻き込みはスムーズだった。
- 他方、事務局は「巻き込むべきステークホルダー」の有無を客観的にみることが難しかったため、本来ステークホルダーとなってもらうべき人がいたのではないかという懸念はある。

地域のコンセプトを描く！

- マンダラについては、見やすく改良を続けるという課題はあるものの、ステークホルダー、とりわけ地域住民に対する説明の中で「将来像を見せる」ことができたことは、町の将来のイメージ共有に有意義だった。

事業のストーリーを語る！

- 「事業のタネ」の具体化・事業化は、ステークホルダーの多様性、人数、情報量で大きく変わってくる。

地域の目標を立てる！

- 他の主要な計画（例えば、総合計画やSDGs未来都市計画）に地域循環共生圏構築における地域の目標や成果指標をリンクさせることで、相互作用が生じるというプラスの効果が表れた。

2ヶ年の取組におけるボトルネックや新たに見えてきた課題

■ 包括的課題/ボトルネック

- ・COVID-19の影響は大きく、突発対応が必要になる可能性を念頭に置いておく必要がある。
- ・ソフト事業は、ハード事業とセットで検討しなければならないことが多いため、その予算確保をセットで考えておく必要がある。

■ 事業のタネ別課題

▶ 地熱を利用したスマートアグリビジネス事業

- ・COVID-19の影響により、海外からのカカオの苗木の調達が困難。
- ・地熱発電事業者の実証実験を行う場合、毎年約3週間を要するメンテナンスのため、地熱ハウスに熱の供給ができない。
- ・冬にメンテナンスが行われた場合の対応が必要。

▶ グリーンスローモビリティの社会実装の検討

- ・自前の車両で実証実験を行う場合、運賃の回収ができない（法規制）。
- ・国道走行にスローモビリティは不適格。
- ・他方、無料だと正確な乗車人数を調査することができない。

▶ ツーリズム（グリーン、医療、教育）によるSDGs（地域循環共生圏づくり）の普及展開

- ・COVID-19に限らず、様々な感染症及び社会状況による、開催時期や最終的な決行・中止の判断

今後の展望

地熱を利用したスマートアグリビジネス事業

カカオ生産の事業化を目指す

グリーンスローモビリティの社会実装の検討

公共交通の充実を図る

ツーリズム（グリーン、医療、教育）によるSDGs（地域循環共生圏づくり）の普及展開

背景：森林資源を活かした小国町のまちづくり



道の駅・ゆうステーション



小国ドーム（町民体育館）



木魂館（研修宿泊施設）



廃校となったままの旧西里小学校校舎

- 小国町は、昭和の終わりから**林業振興**、**森林の適正管理**、そして**木材の地産地消**を目的に、間伐材を活用した大型木造公共建築を建築し、**小国杉を地域デザインのテーマとしたまちづくり**を行ってきた。
- これらは町のシンボル・ランドマークとなり、今も多くの人々に利用されている。
- 他方、価値ある建物として評価されつつ、活用されていない旧小学校校舎がある。

【課題】①旧西里小学校の活用 ②木造建築の経年劣化 ③木造建築物の有効性の証明（環境、健康、持続可能性）

今後の展望

ESD(持続可能な開発のための教育)ツーリズム + 拠点整備



(1) 環境学習 ⇒ 既に進行中

- 環境教育の推進に取り組む協定を企業と締結（令和2年6月）
- 旧西里小学校活用プロジェクトチーム（町・企業・地域住民）を設置し、最終的な方向性、ビジョンの決定、実施に向けた課題の抽出、解決策の提案等を進めており、令和3年度からイベント等を開始する予定。

【課題】

- 拠点が整備されていない
- 公共木造建築（旧西里小）の活用



(2) 世界遺産や地域の文化財等に関する学習 ⇒ 支援チーム派遣希望

③地域資源

- ・旧西里小学校校舎

④事業

- ・アカデミックツーリズム（建築学）
- ・研究・交流拠点整備/旧西里小（調査研究、人的交流）



⑤成果

- ・旧校舎の活用
- ・木造建築物の持続可能性の追求（モデル化）による林業振興
- ・町内学校の児童生徒への質の高い教育の提供
- ・更なるESDの展開（環境・ICT教育、生物多様性の保全、気候変動等）
- ・サテライトオフィスとしての利用事業者数の増加/賑わいの創出
- ・都市と農山村の交流（交流・関係人口）
- ・人材育成や雇用の創出
- ・宿泊等による経済効果

①ありたい未来

SDGs推進のための研究・交流拠点整備と新産業が創出できるまち

＜アカデミックツーリズム＞

- 建築学の視点から木造建築物を評価し、その活用や可能性を探る。
 - 建築の専門家や研究者・学生による調査・修復プログラムの作成
- ⇒専門家対象のモニターツアー

＜研究・交流拠点整備＞

- アカデミックツーリズムのプログラムとして行う
- SDGs視察受入れや(1)環境学習の拠点としても期待できる。

＜希望する支援＞

- 建物の現状把握のための建物既存調査
- モニターツアーの実施
- 専門家・地域コーディネーターの派遣